

## 1. 網膜色素変性における遺伝子型と黄斑部合併症の関連 (中村 駿)

網膜色素変性(RP)の黄斑部疾患合併について、原因遺伝子との関連を検討した報告はこれまでない。今回九州大学病院に通院する RP 患者のうち、原因遺伝子として 10 例以上認めた EYS-RP 42 例、USH2A-RP 19 例、RHO-RP 14 例の計 75 例 150 眼(男性 37 例、女性 38 例、平均年齢 51.2±12.7 歳)を対象として、黄斑部合併症の割合を検討した。EYS-RP 群では黄斑前膜の有無でマージナルな関係を認めたが、その他の群ではいずれの黄斑部合併症とも関連を認めなかった。今後症例数を増やした検討が望まれる。

## 2. 網膜光障害と黄斑色素 (下川桜子)

白内障手術の際の顕微鏡照明が眼に悪影響を及ぼす可能性があると推定されているが、実際の黄斑部の網膜光障害について十分に検討した報告は少ない。今回、我々は白内障手術における黄斑色素密度の変化を調査した。23 歳から 60 歳までの健常眼を対象にした先行調査では、黄斑色素スクリーナー-MPS II を用いて、細隙灯顕微鏡下に約 20 秒間の黄斑部光刺激を行う前後の黄斑色素密度を測定した。健常眼 19 人 19 眼のうち、7 眼において約 19%の黄斑色素密度減少がみられ、反対眼では変化がみられなかった。今後、当科で白内障手術を施行される方を対象に、実際の手術における黄斑部光刺激について調査予定である。

## 3. 点眼だけで造影するコーンビーム CT 涙道造影の精度 (鈴木 亨)

Tshopp はコーンビーム CT を用い、造影剤を点眼するだけで涙道造影が可能であることを示した(2014) 1)。その後 Karlin はその診断精度が検討し、涙小管が造影されないことが診断精度を悪くしていると結論した(2020) 2)。当院のデータは逆で、涙嚢炎を除外すれば涙小管の診断にも精度が高い。その解析結果を供覧する。

## 4. レーザー治療が有効であった視神経乳頭部毛細血管腫の 1 例 (船津治彦)

視神経乳頭部毛細血管腫は、まれであるが増大すると重大な視機能障害を起こす疾患で明確な治療法はない。今回我々は視神経乳頭部毛細血管腫に対して、レーザーによる腫瘍の直接凝固を 20XX+2 年 8 月から 20XX+3 年 5 月にかけて計 10 回行い、視神経乳頭の陥凹が確認できるまで腫瘍を縮小させた。その後 11 ヶ月再増大なく、視力低下や視野障害を生じていない。今回の症例でレーザー直接凝固は視力や視野を障害することなく治療できる可能性がある。

## 5. 汎ぶどう膜炎を伴わない多巣性脈絡膜炎の 2 例 (河野佳鈴)

多巣性脈絡膜炎(multifocal choroiditis :MFC)は様々な原因で発症するが、特発性 MFC の中には前部ぶどう膜炎や硝子体炎を併発しないものも存在する。

我々は汎ぶどう膜炎を伴わない黄斑周囲に白色病変を認めた特発性 MFC の 2 例を経験したのでその経過を報告する。MFC は診断が重要であり網膜白点症候群の鑑別と予後予測のため、マルチモーダルイメージングの活用が有用である。

## 6. 最近 5 年間の九大ぶどう膜新患患者の動向 (浅原健一郎)

ぶどう膜炎の動向は、地域や人口構成・生活習慣の変化、診断技術の進歩などによって推移するため、同一施設で年次による変化をみていくことは重要である。今回我々は、2015 年 4 月~2020 年 3 月の 5 年間に九州大学病院を受診したぶどう膜炎初診患者 795 例を対象に病型別・年齢別に分類し、過去の統計や全国調査と比較し、北部九州におけるぶどう膜炎患者の最近の動向を調査したので報告する。

## 7. シークエンス解析を行った真菌性眼内炎の 2 例 (加藤喜大)

【緒言】眼内炎は早期起炎菌の同定が視機能温存に重要である。真菌性眼内炎 2 例に対し塩基配列解析を行った。【症例】症例 1 は *C. albicans* による菌血症の後、内因性眼内炎で硝子体手術施行。前房水の塩基配列解析で *E. oligosperma* が検出。症例 2 は外傷性感染性眼内炎で硝子体手術施行。硝子体培養より *S. epidermidis*、塩基配列解析で *Botryobasidium* sp を検出。【考按】塩基配列解析は菌交代現象、混合感染を検出できる可能性がある。

## 8. 経過中にビタミンA欠乏の診断に至った角膜穿孔の一例（近藤千尋）

目的：経過中にビタミンA欠乏症の診断に至った角膜穿孔の一例を経験したので報告する。

症例：48歳女性。2021年1月に右眼球陥凹を自覚し、角膜穿孔及び左角膜上皮障害を認めた。ビタミンA欠乏が疑われレチノール蛋白を測定したところ低値であり角膜軟化症による角膜穿孔と診断し、全層角膜移植術を施行し左角膜所見も改善した。

考按：非感染性の角膜穿孔では背景からビタミンA欠乏症による角膜軟化症を鑑別にあげる必要がある。

## 9. 眼科受診を契機に伝染性単核球症の診断に至った1例（福山文理）

【緒言】今回我々は眼科受診を契機に伝染性単核球症の診断に至った1例を経験した。

【症例】10歳女性。両眼眼瞼腫脹を主訴に小倉医療センター眼科受診。初診時、両眼上眼瞼外側浮腫、同部に皮下腫瘤を触知。MRIで両側涙腺腫大、白血球・異型リンパ球高値、肝機能障害を認め、小児科紹介で伝染性単核球症と診断。経過観察で上記症状は消失。

【結語】小児の涙腺腫大では伝染性単核球症も鑑別に重要である。

## 10. 姉妹で異なる特徴を示したCRB1遺伝子変異を伴う網膜ジストロフィ（二見拓磨）

CRB1遺伝子は視細胞の形態形成に関与し、その変異は常染色体劣性網膜色素変性やLeber先天盲の原因となる。また、色素性傍静脈網脈絡膜萎縮症(PPCRA)やCoats病様変化を伴う症例がある。我々はCRB1遺伝子変異による異なる特徴的所見を示した姉妹例を経験した。姉妹でそれぞれPPCRAと網膜新生血管を認めた。CRB1遺伝子変異によって同一の遺伝型であっても異なる所見を示しうる。詳細な画像診断は診断確定に有用であった。

## 11. 複視、頭痛が初発症状であった抗リン脂質抗体症候群による脳静脈洞血栓症の1例（津田祐希）

【目的】脳静脈洞血栓症は診断に難渋することも多い疾患である。今回複視、頭痛を初発症状とした脳静脈洞血栓症を経験したので報告する。

【症例】28歳女性、内斜視、両うっ血乳頭を認め、頭蓋内圧亢進が疑われた。抗リン脂質抗体陽性であり造影MRVにて脳静脈洞に血栓を指摘され診断に至った。抗凝固療法で症状は改善した。

【考察】頭蓋内圧亢進が疑われた場合には脳静脈洞血栓症も念頭におき、精査していくこと重要である。

## 12. 網膜硝子体外来（石川桂二郎）

## 13. ぶどう膜外来・角膜外来（八幡信代）

### 特別講演

#### 「沖縄からCSCの病態を再考する」

#### 琉球大学大学院医学研究科医学専攻眼科学講座 古泉 英貴 教授

中心性漿液性脈絡網膜症(CSC)は黄斑部に漿液性網膜剥離を生じる疾患であり、日常臨床でもしばしば遭遇するため、正確な診断と適切なマネジメントが必要である。CSCは自然寛解例もみられるが、遷延と再発を繰り返し対応に難渋するケースも多く、続発的に脈絡膜新生血管を生じることも知られている。演者が2017年に琉球大学に赴任した際、本土と比較してもCSC患者が非常に多いことに驚いた。あくまでも個人的な印象であり断定的なことは言えないが、沖縄でかつて行われた大規模疫学研究である久米島スタディで示されたように、沖縄県民は短眼軸眼が多く、そのような解剖学的背景の影響もあるのかもしれない。強度近視眼においてCSCがほとんどみられないことも、その仮説を支持するものであるといえる。本講演ではCSCの病態解明に向けた我々の最近の研究成果を御紹介したい。